

教授に就任して

顎顔面口腔外科学分野 富原 圭



本年7月1日付けで富山大学歯科口腔外科学講座より本学に赴任して参りました富原 圭でございます。皆さまどうぞよろしくお願い致します。

私は本学の31期生で、2001年3月に卒業しました。卒業後の進路として口腔外科医の道を選び、まず漠然と「口腔癌を学びたい」という一心で、札幌医科大学口腔外科の門をくぐりました。教授の小浜源郁先生は、口腔扁平上皮癌の浸潤様式「山本-小浜分類（YK分類）」を提唱したことで有名で、当時の教室は、単科で50床という大きな規模、しかも医局員の数も驚くほど大勢でした。私の同期研修医は総勢13名で、そのうちの一人が口腔病理学分野の山崎学先生でした。私の自家用車に荷物を積んで、山崎先生と一路、新潟港からフェリーで北海道へと向かったのですが、二人とも食事が喉を通らないくらい不安と緊張で研修初日を迎えたことを今でも覚えております。研修医生活は、朝晩の点滴をはじめ、病棟業務に四苦八苦し、先輩や看護師さんに叱られながら、夜は反省会と称し連日のように先輩に連れられ居酒屋で飲んで食べて、さらにススキノで遊んでの日々でしたが、今となっては良い思い出です。1年間の研修を終えた山崎先生は、その後再び小樽港から新潟へと戻ったのですが、離れ行くフェリーにいつまでも手を振り、同期の皆で号泣したことを思い出します。

臨床研修を終えた私は、その後大学院へと進み、小浜先生に懇願し、分子医学研究部門の濱田洋文先生、加藤和則先生の指導を仰ぐこととなり、腫瘍免疫学を学びました。当時を振り返ると、内科や外科の先生方というのは臨床のキャリ

アを積んでから大学院生となる人がほとんどで、臨床医として第一線で活躍しながら、リサーチも真剣に取り組んでいる諸先輩の姿に、若造の私は強く感化され、憧れをいただきました。

学位取得後は再び口腔外科医としての研鑽を積むこととなり、現富山大学教授の野口 誠先生、現札幌医科大学教授の宮崎晃亘先生、現那覇市立病院歯科口腔外科部長の仲盛健治先生らのご指導のもと、鉤の引き方からメスの握り方まで、臨床医として基本を学びなおし、さらに大学人としての心構えなどを先輩達の背中を見て学びました。まさに臨床一直線で邁進していたころでしたが、新たなことに挑戦したいという気持ちに駆られ、2008年より米国テキサス大学衛生科学センターサンアントニオ校のポスドクとして、再び腫瘍免疫学の研究に従事することとなりました。ポスドクとしての私のお給料は年収にして\$30,000程度とわずかでしたが、貧しいながら家族で本当に大切な時間を過ごすことができました。しかし、テキサスに少し長居してしまった私は、その後、札幌医大に戻るタイミングをすっかり逃してしまい、かつての上司の野口先生を頼って、2011年より富山大学に入局し、以後11年間を富山でお世話になりました。

私はこれまでに新しい環境にチャレンジする前は、必ず一分一秒と迷いに迷ってきましたが、かつて、恩師の一人から、「行った先で頑張れば、そこが一番良いと思えるはず」と助言をいただきました。私自身がこれまでの道のりで、そのように思えたかどうかは別として、新しい環境に身を投じることの醍醐味は、人との出会い、新たな人脈形成です。今回、新潟大学に赴任するにあたって、皆様と出会えること、そして共に学ばせていただくことを楽しみにやってきましたので、これからどうぞよろしくお願いいたします。